

第 31 回いたばし国際絵本翻訳大賞 イタリア語部門 講評

今回の課題絵本 *Vorrei un tempo lento lento* は、時間をどんなふうに過ごしたいのかという思いが、詩の形式で綴られたものです。語り手は小さな子供ですが、ふだん時間に追われている私たち大人にもおおいに共感できる内容ですね。「時間」という、とくく哲学的になりがちな概念を、子供にとって身近な言葉で語った文章と、シンプルな線で描かれたほのぼのしたイラストとで、温かみのある世界観がひろがります。

細かく意味をとっていく前に、まずは全体を通して声に出して読んでみてください。耳に心地いいリズムカルな文章ですね。それは、ほぼ同じ長さの文章が4行ごとにまとまった、四行連詩になっているからです。しかも2行目と4行目が毎回必ず韻を踏んでいる。イタリアの絵本には、こうした4行連詩の形式で書かれたものがよくみられます。

それに気づく前に、冒頭からいきなり日本語に訳しはじめてしまうと、意味を理解して日本語におきかえる作業で頭が一杯になってしまい、訳文の長さやリズムを整えることにまで気がまわらなくなってしまうので、注意が必要です。

とはいえ、これを一編の詩として訳しあげるのは至難の業。皆さんかなり頭を悩ませたのではないのでしょうか。必ずしも4行でなくても構わないのですが、まずは行数をそろえることを意識してみてください。それだけで訳文にリズムが出てきます。韻を踏ませることはさすがに難しいので、1行の文字数をだいたいそろえてみる。すると、詩らしき形態を成してきます。

主語は *io* ですが、主語や、あるいは所有格の *mio* を、ひとつひとつすべて「ぼく」「ぼくの」などと訳すと、情感が失われてしまいます。むしろ、主語は敢えて立てずに訳したほうが、普遍性が出ていいのかもしれない。

なんといっても頭を悩ませるのは、*tempo* + 形容詞の組み合わせで(*tempo attornio*、*tempo stanco*、*tempo tondo*、*tempo antico*……)何通りにも展開していく時間の描写をどう訳すか。たとえば、*antico*。辞書を引くと、「古い」に始まり、*antico* の語義がたくさん並んでいます。それらをヒントに、日本語の類語辞典なども参照しながら、「おじいちゃん」とか、「風揚げ」といったイメージと結びつくものを探していくのです。「古い」ではあまりしっくり来ませんね。「むかしの時間」とか、「なつかしい時間」などと訳してあげると、おなじページにならぶほかの単語たちと調和する文章になるでしょう。「レトロな時間」と訳して下さった方もいました。なかなか訳語が定まらないときには、反意語の組み合わせに注目するのも効果的です。たとえば、*tempo allegro*。allegro という形容詞ひとつで決めてしまうのではなく、そのあとに出てくる *grigio* と対を成す概念として選んだほうが、流れが自然になります。「わくわく」⇔「どんより」「ゆかい」⇔「さびしい」「キラキラ」⇔「ブルーな」といった組み合わせがみられました。なかでも難題なのが、*tempo giusto*。*giusto* には、「公平な」「正しい」「ぴったりな」など、様々な語釈があって、どんな意味合いで用いられているかわからない。そんなときは、まわりから固めていくのがいいでしょう。*tempo giusto* のなかならば、安心して過ごすことができ、未来を彩ることができる。だとしたら、この *giusto* はどんな時間かと考えてみるのです。「せいぎのみかたじかん」(特別賞)という名訳もありました。

もうひとつ、全体の流れにも目を配る必要があります。冒頭の、*Vorrei un tempo lento fin dal primo mattino* (朝早くからのんびりとした時間がほしい)。ベッドは *caldo guscio* (あたたかい卵の殻) で、*io pulcino* (僕はひよこ) だという情景から語り起こし、真ん中あたりでまたおなじように、*tempo lento* がほしい、それは *a forma di bambino* (子供の形をしている) と繰り返し、最後にまた、*tempo lento* がほしい、*per essere bambino* (子どもでいるために)、卵の殻のなかに戻って、*fingermi pulcino* (ひよこのふりをするために) と環が閉じるという構成になっていることを見逃さないようにしてください。このような場合には、原文で繰り返されている単語の訳語はそろえたほうが効果的でしょう。

最後にもう一度、Vorrei un tempo lento che non finisse più(決して終わることのないゆっくりの時間がほしい)と繰り返し、そのうえで、Continua questa storia, cosa vorresti tu? と、読み手にお話の続きを託しています。この最後の文章が読み取れていなかった方が意外に多かったのですが、questa storia は、continua の主語ではなく、直接目的語になっています。つまり、主語を tu(読み手)とする命令文なのです。-are 動詞の直説法現在形の三人称 continua と、二人称の命令法現在形 continua は同じなので、たしかに見分けの難しいところでした。「物語は続きます」という意味でしたら、Questa storia continua. という語順になるのが自然でしょう。Cosa vorresti tu? は、直訳すると「君はなにが欲しい?」という漠然とした問いかけですが、お話の流れから、「君はどんな時間がほしい?」と尋ねているのだと推測できます。読み手が、tempo + 形容詞で物語を続けられるように、言葉を補って訳してあげるのがいいかもしれません。

以下にいくつか、解釈の難しかったところや、間違いの多かった箇所をあげておきます。

・1 ページ FIN DAL PRIMO MATTINO, ⇒ 前置詞 fin (fino) は、通常は「～まで」という意味で用いられますが、前置詞 da が後ろに来たとき、「～からずっと」という意味合いになるので注意が必要です。

・4 ページ PRIMA FIORE, POI FRUTTO. ⇒ 食べものとしての「果物」は frutta と女性形になります。ここでは frutto と男性形ですから、食べられるか食べられないかは関係なく、より一般的に「植物の実」という意味です。

・7 ページ VORREI AVERE UN TEMPO, MIO, MA PROPRIO TUTTO, ⇒ ma はここでは逆説の接続詞ではなく、強調の意味で用いられています。あえて訳出するとしたら、「とにかく」ぐらいでしょうか。そのあとに続く proprio も、やはり強調です。

・8 ページ CADERE PER RIALZARSI OPPURE ROTOLARE. ⇒ rotolare の部分は、rialzarsi との並列です。「転んで、また起きあがるか、あるいはそのまま転げまわる」という意味になります。

・9 ページ SILENZIO, QUELLO VERO! ⇒ quello は、silenzio を指しています。ですので、「静けさ、本物の静けさ」と、vero は silenzio を強調する役割を果たしています。

・9 ページ TUFFARMI A CAPOFITTO ⇒ tuffarsi a capofitto は、文字通りには「頭から飛び込む」という意味ですが、「～に没頭する」という意味の慣用表現としても用いられます。ここで注意しなくてはならないのは、tuffarsi する場所が nel silenzio だということです。絵につられたのか、「水」という言葉を補って訳した方が多くいました。「しずけさに身を沈める」といったぐらいの意味です。

・11～12 ページ PER LIBERAR LE MANI E COSTRUIRE MONDI CHE SEMBRANO LONTANI. ⇒ 直訳すると、「両手を自由にして、遠くに思える世界をつくりあげる」となります。

・14 ページ LO VORREI ASSENTE ⇒ lo は「時間」を指しています。直訳すると、「時間がそこにいないことを望む」という意味です。

・20 ページ PER FARLO RIPOSARE ⇒ farlo の lo も、やはり「時間」を指しています。「時間を休ませてあげるために」。いつも時間に縛られてあくせくしているのは、人間だけでなく、時間自身もだという発想がユニークですね。

・22 ページ INCOLLATO CON BARUFFE, VERE SCUSE, PATTI E BACI. ⇒ incollato が修飾しているのは、1行目の tempo tondo です。con は、手段を表現するときに用いられる前置詞ですから、baruffe、vere scuse、patti、baci の4つのものでつなぎあわされた、という意味です。「けんかとか ところからのごめんね、やくそくや ほっぺのチュッで しっかりかためられている。」(優秀賞)

・23 ページ ADATTO PER SOGNARE O PER QUEL CHE PASSA IN MENTE. ⇒ この形容詞 adatto も、やはり1行目の tempo libero を修飾しています。「ゆめをみるのに ぴったりの／ひらめく ことにもぴったりの」(最優秀翻訳大賞)

・27 ページ ANCORA DA INVENTARE ⇒ 直訳すると、「まだこれから発明されるべき」という意味です。

・27 ページ RIEMPIRLO A POCO A POCO E POI LASCIARLO ANDARE. ⇒ ここで用いられている lo も、どちらも tempo を指しています。「すこしずつうめていって それからじゆうにしてあげるんだ。」(優秀賞)

今回の課題テキストは、詩ならではの独特な言葉遣いに戸惑われた方もきっと多かったことでしょう。同時に、時間を表現するのに、こんなにも豊かな語彙があるのだということに、驚いたのではないのでしょうか。詩を翻訳するときには、ただ意味をイタリア語から日本語に置き換えるだけではなく、文章の長さやリズム、そして音にまで気を配る必要があります。その際、すべてをとることはできませんので、なにを大事にしながら訳していくのか自分なりに吟味しなければなりません。何通りかの同義語(表現)のなかから、長さやリズムや音がそろったものを探すことも必要となりますので、ふだんから日本語でも詩を読んでみたり、言葉遣いの美しい散文を読んでみたりしながら表現力を鍛えておくといいでしょう。訳文を考えることをきっかけに、時間の捉え方も変わり、日々細切れに、単調に過ぎていってしまう時間を、こんなふうに豊かに過ごせるようになったら素敵ですね。

最優秀翻訳大賞の方は、全体を通して、詩の形式を意識し、リズムを持たせた訳文に仕上げてくださいました。

「むかしの じかんが ほしいな／そこでは たこが あがってる／ともだちの ような おじいちゃん／いっしょに うたを つくるんだ」

意味をしっかり押さえながら、各行の文字数もほとんどそろった、完成度の高い翻訳といえるでしょう。皆さんもう一度、原文の形式を意識しながら、ご自分の翻訳を声に出して読んでみてください。さらなる工夫の余地はないか振り返ってみることで、次へのステップにつながると思います。

イタリア語部門 審査員 関口英子